

日本環境心理学会  
第 11 回大会  
プログラム

2018.3.24

於：東京都市大学横浜キャンパス





## 日本環境心理学会 11 回大会プログラム

### [日時]

2018年3月24日(土) 10:00~17:30

### [場所]

東京都市大学横浜キャンパス 3号館1F31A教室

(横浜市都筑区牛久保西3-3-1 横浜市営地下鉄中川駅より徒歩6分)

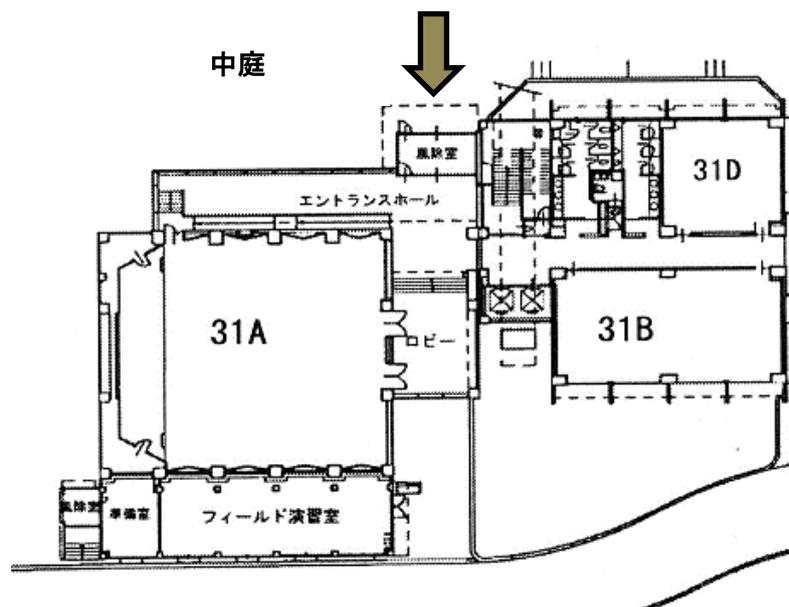
<http://www.yc.tcu.ac.jp/access/index.html>

連絡先: 045-910-2586 (広田研)

### [タイム・テーブル]

9:30	受付開始	
10:00~11:45	ワークショップ	31A教室
(12:00-13:00)	運営委員会	31D教室)
13:00~13:45	総会 (31A教室)	
14:00~16:20	口頭発表 (31A教室) (発表 12分+質疑3分、総合討論 10分)	
14:00-15:00	セッション1:口頭発表1~5	
	座長: 雨宮護 (筑波大学システム情報系社会工学域)	
	(休憩 10分)	
15:10-16:20	セッション2:口頭発表6~9	
	座長: 羽生和紀 (日本大学)	

☆東京都市大学横浜キャンパス  
3号館1F(部分)



## 発 表 要 旨

★ワークショップ 『舞台の環境心理学』 10:00-11:45 (31A 教室)

企画・司会者：広田すみれ(東京都市大学)

話題提供者：坂手洋二 (非会員・劇団「燐光群」主宰)

話題提供者：加藤智宏 (office Perky pat)

指定討論者：白川(陶) 真裕 (日大文理学部人文科学研究所)

趣旨：芝居など舞台の演出ではパーソナルスペースの使い方や空間の切り方、ライティングの利用等、環境心理学的な要素が多く含まれているが従来あまり検討されたことがない。そこで、今回は劇団「燐光群」を主宰し、脚本や演出を手掛けてきた前日本演出者協会理事長で岸田国土戯曲賞選考委員でもある坂手洋二氏と、坂手氏の旧知の友人で本学会前運営委員で自らも演出をされている加藤智宏氏に話題提供を頂いたうえで、指定討論者やフロアから議論いただき、環境心理学的な研究としての今後の展開を参加者と考えていきたい。

10:00-10:15 企画趣旨説明：広田 すみれ

10:15-11:00 トークセッション：坂手洋二、加藤智宏

11:00-11:05 (休憩)

11:05-11:15 指定討論：白川(陶) 真裕

11:15-11:45 総合討論

★口頭発表 14:00~15:00

要旨

[セッション1]

座長：雨宮護 (筑波大学システム情報系社会工学域)

1. 店舗責任者の雰囲気評価を基に分類したライブハウスの物理的特性や音の印象評価の特徴

福村薫美 (大阪市立大学大学院工学研究科) ・梅宮典子 (同)

ライブハウスという演奏空間に関して、大阪の79店を対象にアンケート調査を行い、回答の得られた26店について5段階17尺度の店長による雰囲気評価に基づいてクラスター分析によって分類した。その結果、規模、内装、ステージ設備、音の印象評価において、以下のような特徴的な5群が得られた。1) 「鮮やかな」・「派手な」・「豪華な」雰囲気の店は、音の印象が弱々しく静か。2) 「親しみやすい」・「居心地のいい」・「冷たい」・「暗い」雰囲気の店は、内装に材質を問わず黒色が多く、音響・照明機材が少ない。3) 「暖かい」・「明るい」・「柔らかい」雰囲気の店は、規模が小さく、内装に木が多く使われている。4) 「暖かい⇔冷たい」・「明るい⇔暗い」のどちらでもなく、「活気のある」雰囲気の店は、規模が大きく、天井以外の内装に木が使われている。5) 「非日常的な」・「活気のある」・「歴史を感じる」雰囲気の店は、音の印象が騒々しく迫力がある。

## 2. 混住型学生宿舎における異文化交流に影響を与える要因

### ー空間を共有する学生の生活スタイルとルール作りに着目してー

唐曼（筑波大学大学院システム情報工学研究科）・讃井知（筑波大学大学院システム情報工学研究科）・雨宮護（筑波大学システム情報系社会工学域）

国際化の進展に伴い、異文化交流を促進するために日本人学生と留学生が共に生活する混住型学生宿舎（以下、混住寮）に注目が集まっている。本研究では筑波大学の混住寮「グローバルヴィレッジ」（以下、GV）を対象に、住戸ユニット内の異文化交流の度合いを明らかにし、交流に影響を与える要因を解明することを目的とした。ユニット内のルール作り、共用空間の利用、生活時間の重なり、日本人学生の留学生の地域出身に対する期待の4点が異文化交流に影響を与えることを仮説とし、アンケート調査とヒアリング調査を実施した。アンケート調査のデータを使ったパス解析とヒアリング調査の結果、ユニット内のルールに対する満足度と共用設備の充実度が共用空間の利用頻度に正の効果を持つこと、共用空間の利用は異文化交流の頻度に繋がることが示唆された。また、交流のモチベーションも異文化交流にある程度の正の影響を及ぼしていることが明らかになった。

## 3. 幼少期および現在の生活環境は自然風景の好みに影響を与えるか

芝田征司（相模女子大学）

田園、山、林道、溪流、浜辺の5種類の風景写真を評価刺激とし、それらの風景がどの程度好ましく感じられるか、回復的（restorative）と感じられるかに対し、幼少期や現在の生活環境がどのような影響を与えているかについて検討を行なった。対象者は、一般成人960名（男480、女480）で、Web調査によるデータ収集である。本調査の対象者のうち600名は幼少期を山沿い地域で、残りの360名は海沿い地域で過ごしており、かつ両グループともそのうち半数は現在も山沿い・海沿いの地域で、残り半分は現在は都市部で生活している。調査では、5種類の風景刺激のうち2枚ずつの組み合わせを総当たりで作成し、それぞれのペアについてシェフェ法による一対比較で好ましさや回復特性についての質問項目に7段階で評定を求めた。分析の結果、生活環境による影響は大きくはなかったが、風景評価に対して幼少期の生活環境の影響が見られた。

## 4. キャンプにおいて自然とのアタッチメントを感じる体験が小中学生の自然に対する態度を変容させるプロセス

岡田成弘（仙台大学）・坂本昭裕（筑波大学）

本研究の目的は、キャンプにおいて自然とのアタッチメントを感じる体験が、どのように小中学生の自然に対する態度を変容させるかを明らかにすることであった。調査対象は、2016年夏にキャンプに参加した小学5年生～中学2年生15名であった。キャンプの7ヶ月後に、個別に半構造化インタビューを行い、キャンプによって自然に対する感じ方・考え方がどうなったか、キャンプ中に自然とつながるような感覚（アタッチメントを感じる体験）があったかなどを尋ねた。逐語データの分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。その結果、自然への親愛を感じる、畏敬の念を抱く、自然とのつながりを感じるなど自然とのアタッチメントを感じる体験と、メディアや学校などのキャンプ外の要因による影響によって、キャンプ参加者の自然認識に変化が生じ、自然との人間の関係性を考慮することで、自然に対する態度が深まることが明らかになった。

15:00～15:10 休憩

[セッション2] 15:10～16:20

座長：羽生和紀（日本大学）

#### 5. 都市景観写真の緑視率，天空率，道路率の自動計測の試み

羽生和紀（日本大学）・大森宏（東京大学大学院）・山下雅子（東京有明医療大学）・島田諭（東京大学大学院）

都市の道路沿いの景観写真における，植栽の占める割合（緑視率），空の占める割合（天空率），および道路の占める割合を自動的に計測するプログラムの作成を試みた。写真のピクセルごとの RGB 値データを用い，植栽（緑視率）は RGB 値の範囲と相対的關係から検出し，空（天空率）と道路は RGB 値の範囲と相対的關係に加え，道路沿い都市景観の持つ生態学的な構造を踏まえた条件判断を行い検出した。結果，実用的な精度での測定が実現された。道路沿いの都市景観写真においては，植栽，空，道路ではない領域は，ほぼ道路以外の建造物・人工物となるため，道路沿いの都市景観写真における主要な視覚的要素の全ての同時自動計測が可能になったことになる。手作業や複数のプログラムを用いることと比べ，作業効率が改善されることから，特に大量のデータを扱う際には有用性があるだろう。また，実装されたアルゴリズムはシンプルであり，固有のデータに過度に合わせないため，研究の目的に合わせたパラメータの柔軟な調整が可能である。

#### 6 環境制約下でのモノの優先度と価値観の変化

—東日本大震災前後の継続調査から見えたもの—

富村 芽久美（東北大学大学院）・古川 柳蔵（同）

今年の3月11日で，東日本大震災から7年が経過した。私も被災者であり，自宅が半壊した。宮城県をはじめとする，福島，岩手の3県では津波の甚大な被害を受け，多くの人達が尊い命を失った。震災前に，「制約を受けた場合必要なモノ」の調査をネットで行い，震災後も継続して行った。その結果，大災害を経験した地域の人とそうではない人との間に，震災前と後では異なる変化があった。この調査では3種類の分析を行い，①実際に震災の当事者でないと5年後にはその災害の記憶が薄れ，当事者であると価値観が変化し，モノよりも人の心を大切に作る傾向があること。②電力会社関連で何らかの節電アプローチをすると，モノの優先度は低くなり，当事者でないと，その反動で優先度が高くなる傾向が見られたこと。③実際に避難している人と，「制約を受けた場合」を仮想したモノの優先度は異なる。以上の3点が結論付けられた。

#### 7. 中国鄭州市におけるゲーテッドコミュニティのゲートが担う機能の地域差

盧西祥（筑波大学大学院システム情報工学研究科社会工学専攻博士前期課程・  
雨宮護（筑波大学システム情報系社会工学域）・大山智也（筑波大学大学院システム情報工学研究科社会工学専攻博士後期課程）

中国のゲーテッドコミュニティ（GC）は，1990年代以来，大都市で急速に普及した。しかし近年，大量のGCが都市の円滑な交通を妨げ，交通渋滞問題を深刻化させているとの指摘がある。これに対し，

2016年、中央政府は、GCの新設の禁止と、既存のGCの壁とゲートを撤去する方針を含む都市計画意見を公表したが、住民からは反対する声が上がっている。本研究では、ゲートの撤去により、GCにどのような問題が発生するのかを考察するため、現在のゲートに対して住民が認識している機能を明らかにする。中国鄭州市に存在する6つのGCの居住者へのヒアリング調査の結果、GC住民は、ゲートに対して、治安の維持、良好な住環境の提供、社会的地位の象徴という3つの機能を認識していること、また認識される機能は立地環境に対応してGCごとに異なることが明らかとなった。このことから、将来のゲートの撤去にあたっては、GCの立地環境の違いを考慮した対応をとる必要があることが示唆された。

## 8. 総合リユース店舗における万引きに関連する要因の解明 — 一般化線形混合モデルを用いた分析 —

藤本典志（筑波大学大学院システム情報工学研究科社会工学専攻博士後期課程）・大山智也（筑波大学大学院システム情報工学研究科社会工学専攻博士後期課程）・福嶋進（株式会社ベストバイ）・雨宮護（筑波大学システム情報系社会工学域）

総合リユース店舗は、全ての商品が中古商品であるために、取り扱う商品は現品限りの物が多く、商品においても安価なものから高価なものを扱っている。多様な商品全てに対して防犯システムを装着することは困難な一方で、利益を上げるための工夫により商品棚のレイアウトが複雑になり、レジからの監視性が失われているなど、総合リユース店舗の防犯対策には困難な点がある。本研究では、総合型リユース店舗における万引きに関連する要因について、私服保安員（万引きGメン）に対するヒアリングを実施し、万引き被害に関連する要因を探索するとともに、ヒアリングの結果から変数を設定し、万引き被害の要因を実証的に検討する。商品カテゴリーごとのロス率を従属変数とする一般化線形混合モデルを用いた分析の結果、レジからの監視性に関わる要因が万引き発生に関連しているものと考えられた。

16:10～16:20 総合討論

★ポスター発表 16:30～17:30 (31A 前ロビー)

### 要旨

#### P-1 女性・子供を対象とした軽微な性犯罪における近接反復被害仮説の検証

高橋あい（筑波大学大学院システム情報工学研究科社会工学専攻博士前期課程）・雨宮護（筑波大学システム情報系社会工学域）・島田貴仁（科学警察研究所犯罪行動科学部）

警察によるメールやウェブ等を通じた性犯罪の発生情報の配信は、犯罪が1件発生すると、近い日に、また近隣地域で同じ犯罪が頻発しやすくなる性質（近接反復被害）を持つことを前提として行われている。しかしこの仮説は、性犯罪においては実証されていない。そこで本研究では、警視庁から提供された軽微な性犯罪（前兆事案）データを用いて近接反復被害の検証を行う。検証方法は、モンテカルロシミュレーションを応用して作成したデータから犯罪発生地点間の時間的・空間的關係性を計算した上で、それを標本値とし、実測値（実際の犯罪発生地点間時間的・空間的關係性）と比較するという方法である。これにより、1件の犯罪が発生してから、次の犯罪の発生リスクの上昇が見込まれる具体的な時間と空

間の範囲を明らかにし、現状の情報配信内容を評価する。また、性犯罪の種別ごとに近接反復被害の傾向を比較することで、求められる犯罪情報配信戦略の性犯罪種別による違いについても検討する。

## P-2 個人の特性と空間の包囲性に対する好みの関係

西本和月（日大文理学部人文科学研究所）・羽生和紀（日本大学文理学部）

都内の大学生 235 人（有効回答 233 人）を対象に、自分の部屋において最適であると考えられる掃き出し窓の個数、腰高の窓の個数、部屋の広さと、飲食店を一人で訪問した際に座りたい席の配置について回答を求め、また Locus of control 尺度、プライバシー志向性尺度、Big Five 尺度（短縮版）を実施した。その結果、部屋の広さと各尺度には関係が認められず、窓の個数においては、掃き出し窓の個数とプライバシー志向性尺度の「隔離」（周囲から離れた環境で生活する）、Big Five 尺度の「外向性」、「調和性」、「開放性」の関係が認められた。また Locus of control 尺度において窓の個数と性別との交互作用が認められたが、掃き出し窓と腰高窓では内的-外的統制の傾向が異なった。飲食店における座席選択では、選択した席の開放性（壁との関係、入口との関係、背後の状況）とプライバシー志向性尺度の「友人との親密性」、「遠慮期待」、Big Five 尺度の「情緒不安定性」の関係が認められた。

## P-3 写真の背景情報が目撃記憶に与える影響

佐藤芽依・畑倫子（文京学院大学人間学部心理学科）

本実験では写真の人物の背景情報を変化させることで目撃記憶に影響はあるのかを検討することとした。実験協力者が授業開始 20 分経過時に教室に入退室し、授業終了後に目撃情報についての質問紙を配布した。質問紙の刺激画像は、背景画像 3 種類（白、実験場所である大学の教室、コンビニエンスストア）と人物 10 人が Adobe Photoshop で合成されており、ランダムに配布されるように考慮した。目撃証言を特徴ごとに分類したところ、髪型、体型、性格、服装、肌の色、顔立ち、小物、動きについての 8 種類に分類することができ、小物は 22%、性格は 14%、髪型は 12%の人が言及していた。また、実験協力者を見た人は 86%で、その中で実験協力者を正しく言い当てることができた割合は 14%であった。背景情報が教室の場合の正答率が一番高く、白の場合は 0%であった。本研究の結果から背景の環境情報の違いによって目撃記憶の正答率に有意な差が見られ、背景の環境情報は人物を想起する際に影響を与えることが分かった。

## P-4 居住地域の再開発計画の受容に対して地域愛着とモンゴル独自の住まい方が及ぼす影響

坂本剛（名古屋産業大学）・滝口良（北海道大学）・Zorig Tuya（New Urbanism LLC）

ウランバートル市の周縁居住区「ゲル地区」の再開発計画策定にあたっては、社会的合意形成に向けた市民参加が導入されており、住民の心理的変数に注目した合意形成過程の解明が求められる。本研究は合意形成に影響する主要因として、モンゴル独自の住まい方に関する諸要素と居住地域への愛着へ注目をした。居住地域への愛着は開発に対する情緒的抵抗の源泉となる(Altman & Low, 1992)ものの、社会関係資本との間にも強い関連が示唆される(Lewicka, 2011; Mihaylov & Perkins, 2014)。またモンゴル独自の住まい方には移動性や（ゲルや建物などの）セルフビルド、割り込み居住などの特徴が見ら

れる(滝口・坂本・井澗, 2017)が、それらの要素が、開発計画への評価や受容といかに相互作用するかを定量的に説明する試みはこれまで行われてこなかった。本発表では、都市インフラサービスの拠点整備を行う「サブセンター計画」が進む2地点の住民を対象として2017年6月に行った調査データ(N=720)に階層線型モデル分析を適用し、計画受容に至る一連の過程について検討する。